

社会福祉法人国立保育会 経理規程

第1章 総則

(目的)

第1条 この規程は、社会福祉法人国立保育会（以下「法人」という）の経理の基準を定め、適切な経理事務を行い、支払資金の収支の状況、経営成績及び財政状態を適正に把握することを目的とする。

(経理事務の範囲)

第2条 この規程において経理事務とは、次の事項をいう。

- (1) 会計帳簿の記帳、整理及び保管に関する事項
- (2) 予算に関する事項
- (3) 金銭の出納に関する事項
- (4) 資産・負債の管理に関する事項
- (5) 財務の管理に関する事項
- (6) 棚卸資産の管理に関する事項
- (7) 固定資産の管理に関する事項
- (8) 引当金に関する事項
- (9) 決算に関する事項
- (10) 会計監査に関する事項
- (11) 契約に関する事項

(会計処理の基準)

第3条 会計処理の基準は、法令及び定款並びに本規程に定めるもののほか、社会福祉法人会計基準によるものとする。

(会計年度及び計算関係書類及び財産目録)

第4条 法人の会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

2 毎会計年度終了後2カ月以内に下記計算書類及び第3項に定める附属明細書(以下「計算関係書類」という。)並びに財産目録を作成しなければならない。

- | | |
|---------------|-----------|
| ア 資金収支計算書 | (第1号第1様式) |
| イ 事業活動計算書 | (第2号第1様式) |
| ウ 貸借対照表 | (第3号第1様式) |
| エ 拠点区分資金収支計算書 | (第1号第4様式) |
| オ 拠点区分事業活動計算書 | (第2号第4様式) |
| カ 拠点区分貸借対照表 | (第3号第4様式) |

3 計算関係書類として作成する書類は下記とする。

ア 基本財産及びその他の固定資産の明細書	(別紙1)
イ 引当金明細書	(別紙2)
ウ 拠点区分資金収支明細書	(別紙3)
エ 拠点区分事業活動明細書	(別紙4)
オ 借入金明細書	(別紙①)
カ 寄付金収益明細書	(別紙②)
キ 補助金事業収益明細書	(別紙③)
ク 事業区分間及び拠点区分間繰入金明細書	(別紙④)
ケ 事業区分間及び拠点区分間貸付金(借入金)残高明細書	(別紙⑤)
コ 基本金明細書	(別紙⑥)
サ 国庫補助金等特別積立金明細書	(別紙⑦)
シ 積立金・積立資産明細書	(別紙⑧)

4 第2項及び第3項に定める計算関係書類は、消費税及び地方消費税の税込金額を記載する。

(事業区分、拠点区分)

第5条 事業区分は社会福祉事業、及び収益事業とする。

2 拠点区分は予算管理の単位とし、一体として運営される施設、事業所又は事務所をもって1つの拠点区分とし、法人本部は独立した拠点区分とし、理事長室、事業部、保育部は法人本部に包含する。

また、収益事業については別の拠点区分とする。

3 事業活動の内容を明らかにするために、各拠点区分においては拠点区分を設け、収支計算を行わなければならない。

4 前項までの規定に基づき、法人において設定する事業区分、拠点区分は以下のとおりとする。

(1) 社会福祉事業区分

- ① 法人本部 拠点区分
- ② 国立保育園 拠点区分
- ③ 北保育園 拠点区分
- ④ 西国分寺保育園 拠点区分
- ⑤ 富士本保育園 拠点区分
- ⑥ 光が丘保育園 拠点区分
- ⑦ 石神井公園こぐま保育園 拠点区分
- ⑧ きたひだまり保育園 拠点区分
- ⑨ 宮前おおぞら保育園 拠点区分
- ⑩ 上井草保育園 拠点区分
- ⑪ 国立ひまわり保育園 拠点区分
- ⑫ 区立南大泉保育園 拠点区分

- ⑬ 区立氷川台第二保育園 拠点区分
- ⑭ 区立天沼保育園 拠点区分
- ⑮ 天沼保育園 拠点区分
- ⑯ 区立下石神井第三保育園 拠点区分

(共通収入支出の配分)

第6条 資金収支計算を行うに当たっては、事業区分又は拠点区分に共通する収入及び支出を、合理的な基準に基づいて配分するものとする。

2 事業活動計算を行うに当たっては、事業区分又は拠点区分に共通する収益及び費用を、合理的な基準に基づいて配分するものとする。

(統括会計責任者、会計責任者及び出納職員)

第7条 法人の経理事務に関する統括責任者として、統括会計責任者を置くことができる。

2 第5条第2項の拠点区分には、それぞれ経理事務の責任者としての会計責任者を置く。但し、会計責任者としての業務に支障がない限り、1人の会計責任者が複数の拠点区分の会計責任者を兼務することができる。

3 第5条第2項の拠点区分には、会計責任者に代わって一切の経理事務を行わせるため、出納職員を置く。但し、出納職員としての業務に支障がない限り、1人の出納職員が複数の拠点区分の出納職員を兼務することができる。

4 統括会計責任者、会計責任者及び出納職員は、理事長が任命する。

5 会計責任者は、会計事務に関する報告等、理事長もしくは統括会計責任者の指示に従わなければならない。

6 会計責任者は、出納職員を監督しなければならない。

(規程の改廃)

第8条 この規程の改廃は、理事会の承認を得て行うものとする。

第2章 勘定科目及び帳簿

(記録及び計算)

第9条 法人の会計は、その支払資金の収支状況、経営成績及び財政状態を明らかにするため、会計処理を行うにあたり、正規の簿記の原則に従って、整然、かつ、明瞭に記録し、計算しなければならない。

(勘定科目)

第10条 勘定科目は、別表1のとおりとする。

(会計帳簿)

第11条 会計帳簿は、次のとおりとする。

(1) 主要簿

- ア 仕訳日記帳
- イ 総勘定元帳

(2) 補助簿

- ア 現金出納帳
- イ 固定資産管理台帳
- ウ 小口現金出納帳
- エ 寄付金品台帳

(3) その他の帳簿

- ア 会計伝票
- イ 月次試算表
- ウ 予算管理表

2 前項に定める会計帳簿は拠点区分ごとに作成し、備え置くものとする。

3 各勘定科目の内容又は残高の内訳を明らかにする必要がある勘定科目については、補助簿を備えなければならない。

4 会計責任者は、補助簿の記録が総勘定元帳の記録と一致していることを適宜確認し、主要簿及び補助簿の正確な記録の維持に努めなければならない。

(会計伝票)

第12条 すべての会計処理は、会計伝票により処理しなければならない。

2 会計伝票は、証憑に基づいて作成し、証憑は会計記録との関係を明らかにして整理保存するものとする。

3 会計伝票には、勘定科目、取引年月日、数量、金額、相手方及び取引内容を記載し、会計責任者の承認印又は承認のサインを受けなければならない。

(会計帳簿の保存期間)

第13条 会計に関する書類の保存期間は次のとおりとする。

- (1) 第4条第2項に規定する計算書類及び計算関係書類並びに財産目録 10年
- (2) 第11条第1項(1)、(2)に規定する主要簿、補助簿 10年
- (3) 証憑書類 10年

2 前項の保存期間は、計算書類が評議員会の承認を得た時から起算するものとする。

3 第1項(2)及び(3)の書類を処分する場合には、事前に会計責任者の承認を得ることとする。

第3章 予算

(予算基準)

第14条 法人は、毎会計年度、事業計画に基づき資金収支予算を作成する。

2 予算は拠点区分ごとに編成し、収入支出の予算額は勘定科目ごとに設定する。

(予算の事前作成)

第15条 前条の予算は、事業計画に基づき毎会計年度開始前に理事長が編成し、理事会の承認

を得て確定する。

(予算管理責任者)

第 16 条 予算の編成並びに予算の執行及び管理について理事長を補佐するため、理事長は、予算管理の単位ごとに予算管理責任者を任命する。

2 法人の予算管理責任者は、会計責任者とする。

3 予算管理責任者は、毎月、予算管理資料により予算の執行状況を把握し、予算実績差異の原因分析を行う。

4 予算管理責任者は、予算の執行状況、及び予算実績差異の原因分析の結果に意見を付して、理事長に対し報告を行なう。

5 予算の具体的な管理については、別に定める予算管理規程による。

(勘定科目間の流用)

第 17 条 予算管理責任者は、予算の執行上必要があると認めた場合には、理事長の承認を得て、拠点区分内における中区分の勘定科目相互間において予算を流用することができる。

(予備費の計上)

第 18 条 予測しがたい支出予算の不足を補うため、理事会の承認を得て支出予算に相当額の予備費を計上することができる。

(予備費の使用)

第 19 条 予備費を使用する場合は、予算管理責任者は事前に理事長にその理由と金額を記載した文書を提示し、承認を得なければならない。

2 予備費を使用した場合は、理事長はその理由と金額を理事会に報告しなければならない。

(補正予算)

第 20 条 予算執行中に、予算に変更事由が生じた場合には、理事長は補正予算を作成して理事会に提出し、その承認を得なければならない。

第 4 章 出 納

(金銭の範囲)

第 21 条 この規程において、金銭とは現金、預金、貯金をいう。

2 現金とは、通貨、小切手、紙幣、郵便為替証書、郵便振替貯金払出証書、官公庁の支払通知書等をいう。

(収入の手続)

第 22 条 金銭の収納に際しては、会計責任者（出納職員を設けている場合は、「出納職員」）は、所定の用紙に所定の印を押した領収書を発行するものとする。

2 銀行、郵便局等の金融機関への振込の方法により入金が行われた場合で、前項に規定する領収書の発行の要求がない場合には、領収書の発行を省略することができる。

(収納した金銭の保管)

第 23 条 日々入金した金銭は、これを直接支出に充てることなく、収入後 7 営業日以内に金融機関に預け入れなければならない。

(寄附金品の受入手続)

第 24 条 寄附金品を受け入れた場合には、会計責任者は、寄付者が作成した寄附申込書に基づき、寄附者、寄附金額及び寄附の目的を明らかにして、統括会計責任者に報告するとともに、理事長又は理事長から権限移譲を受けた者の承認を受けなければならない。

(支出の手続)

第 25 条 金銭の支払いは、受領する権利を有する者からの請求書、その他取引を証する書類に基づいて行う。

2 金銭の支払いを行う場合には、会計責任者の承認を得て行わなければならない。ただし受領する権利を有する者が会計責任者の場合は部長職の承認を以って金銭の支払いを行うことができる。

3 金銭の支払いについては、受領する権利を有する者の署名、又は記名捺印のある領収書を受け取らなければならない。

4 銀行、郵便局等の金融機関からの振込の方法により支払いを行った場合で、領収書の入手を必要としないと認められるときは、前項の規定にかかわらず、振込を証する書類によって前項の領収書に代えることができる。

5 金銭の支払いにおいては、原則として個人所有のクレジットカードを使用してはならない。

(支払期日)

第 26 条 毎月末日までに発生した債務の支払いは、小口払い及び随時支払うことが必要なものを除き、当月末日以降に行うものとする。

(小口現金)

第 27 条 小口の支払いは、随時補給制度による資金（以下「小口現金」という）をもって行う。

2 小口現金を設ける場合には、会計責任者が、その必要性を文書により説明したうえで、統括会計責任者の承認を得なければならない。

3 小口現金の限度額は、拠点区分ごとに 10 万円とする。

4 小口現金は、毎月末日及び不足の都度精算を行い、精算時に主要簿への記帳を行う。

(概算払)

第 28 条 性質上、概算をもって支払いの必要がある経費については、第 25 条第 1 項の規定にかかわらず概算払いを行うことができる。

2 概算払いをすることができる経費は、次に掲げるものとする。

(1) 旅費

(2) その他会計責任者が特に必要と認めた経費

(残高の確認)

第 29 条 会計責任者（出納職員を設けている場合は「出納職員」）は、現金について、毎日の現金出納終了後、その残高と帳簿残高を照合しなければならない。

2 会計責任者（出納職員を設けている場合は「出納職員」）は、預貯金について、毎月末日、取引金融機関の残高と帳簿残高とを照合し、差額がある場合には預貯金残高調整表を作成して、統括会計責任者に報告しなければならない。

3 前二項の規定により報告を受けた統括会計責任者は、その事実の内容を確認しなければならない。

(金銭過不足)

第 30 条 現金に過不足が生じたとき、会計責任者（出納職員を設けている場合は「出納職員」）は、すみやかに原因を調査したうえ、遅滞なく統括会計責任者に報告し、必要な指示を受けるものとする。

2 前項の規定により報告を受けた統括会計責任者は、その事実の内容を確認しなければならない。

(月次報告)

第 31 条 会計責任者は、各拠点区分ごとに毎月末日における月次試算表を作成し、翌月 27 日までに統括会計責任者に提出しなければならない。

2 統括会計責任者は、前項の月次試算表に基づき、各事業区分合計、及び法人全体の月次試算表を作成し、前項の月次試算表を添付して、翌月末日までに理事長に提出しなければならない。

3 会計責任者が複数の拠点区分の会計責任者を兼務している場合には、兼務している拠点区分を統合した月次試算表を作成することができる。但し、その場合においても、各拠点区分ごとの資金収支、及び事業活動の内訳を明らかにして、作成しなければならない。

第 5 章 資産・負債の管理

(資産評価の一般原則)

第 32 条 資産の貸借対照表価額は、別に定める場合を除き、原則として、当該資産の取得価額による。

2 資産の時価が、帳簿価額から 50%を超えて下落している場合には、時価が回復する見込みがあると認められる場合を除き、会計年度末における時価をもって評価するものとする。

3 通常要する価額と比較して著しく低い価額で取得した資産又は贈与された資産の評価は、取得、又は贈与の時における当該資産の取得のために通常要する価額をもって行う。

4 交換により取得した資産の評価は、交換に対して提供した資産の帳簿価額をもって行う。

(債権債務の残高確認)

第 33 条 会計責任者は、毎月末日における債権及び債務の残高の内訳を調査し、必要がある場合には、取引の相手先に対し、残高の確認を行わなければならない。

2 前項の調査の結果、相手先の残高との間に原因不明の差額があることが判明した場合には、遅滞なく統括会計責任者に報告し、措置に関する指示を受けなければならない。

(債権の回収・債務の支払い)

第 34 条 会計責任者は、毎月、期限どおりの回収、又は支払いが行われていることを確認し、期限どおりに履行されていないものがある場合には、遅滞なく統括会計責任者に報告し、適切な措置をとらなければならない。

(債権の免除等)

第 35 条 法人の債権は、その全部もしくは一部を免除し、又はその契約条件を変更することはできない。但し、理事長が法人に有利であると認めるとき、その他やむを得ない特別の理由があると認めるときはこの限りでない。

第 6 章 財務の管理

(資金の借入)

第 36 条 長期の資金を借り入れる（返済期限が 1 年を超える資金の借り入れをいう）場合には、会計責任者は、その理由及び返済計画に関する文書を作成し、統括会計責任者、及び理事長の承認を得なければならない。

2 短期の資金を借り入れる（長期の資金の借り入れ以外の借り入れをいう）場合には、会計責任者は、文書をもって統括会計責任者、及び理事長の承認を得なければならない。

(資金の積立て)

第 37 条 将来の特定の目的のために積立金を積み立てた場合には、同額の積立資産を積み立てなければならない。この場合において、積立資産には、積立金との関係が明確にわかる名称を付さなければならない。また、積立金に対応する積立資産を取崩す場合には、当該積立金を同額取崩さなければならない。

2 資金管理上の理由から積立資産の積み立てが必要とされる場合には、前項の規定にかかわらず、積立資産の積み立てを行うことができる。但し、この場合において、積立資産には積み立ての目的を明示した名称を付すとともに、理事会の承認を得なければならない。

3 積立資産を専用の預金口座で管理する場合には、決算理事会終了後 2 か月以内に資金移動を行わなければならない。

(資金の運用等)

第 38 条 資産のうち小口現金を除く資金は、確実な金融機関に預け入れ、確実な信託会社に信託して、保管するものとする。

2 余裕資金の運用、及び特定の目的のために行う資金の積み立ては、資金運用規程の基本原則に従って行わなければならない。

3 会計責任者は、毎月末日に資金（積立資産を含む）の残高の実在を確かめ、その内容を理事長に報告しなければならない。

（金融機関との取引）

第 39 条 金融機関と取引を開始又は解約する場合には、会計責任者は理事長の承認を得て行わなければならない。

2 金融機関との取引は、理事長名をもって行う。

3 金融機関との取引に使用する印鑑は、理事長が責任をもって保管するものとする。

4 理事長は、実務上必要と判断した場合には、前項の規定にかかわらず、金融機関との取引に使用する印鑑の保管責任者として、次の業務を担当しない会計責任者、施設長等を指名して、印鑑の保管を命ずることができる。

(1) 現金預貯金(小口現金を含む)の出納記帳

(2) 預貯金の通帳及び証書の保管管理

(3) 現金（小口現金を含む）の保管管理

5 前項の場合において、理事長は、定期的に保管責任者から独立した理事又は職員に印鑑の保管及び使用の状況の調査を指示し、その報告を受けなければならない。

第 7 章 棚卸資産の管理

（棚卸資産の範囲）

第 40 条 この規程において、棚卸資産とは、下記のをいう。

ア 給食用材料

（棚卸資産の取得価額及び評価）

第 41 条 棚卸資産の取得価額は次による。

(1) 製品又は仕掛品以外の棚卸資産については、購入代価に購入直接費(引取運賃・荷役費・運送保険料・購入手数料・その他の引取費用)を加算した額。

(2) 製品又は仕掛品の取得価額は、一般に公正妥当と認められた原価計算の基準に基づいた方法によって算定する。

2 棚卸資産は、「最終仕入原価法」に基づく原価法により評価する。

3 棚卸資産の時価が取得価額よりも下落した場合には、時価をもって評価するものとする。

（棚卸資産の管理）

第 42 条 棚卸資産については、その品目ごとに受払帳を備え、移動及び残高を把握しなければならない。

2 会計責任者は、毎会計年度末において棚卸資産の实地棚卸を行い、正確な残高数量を確かめなければならない。

3 棚卸資産のうち、毎会計年度一定量を購入し、経常的に消費するもので常時保有する数量が明らかに1年間の消費量を下回るものについては、販売目的で所有する棚卸資産を除き、第1項の規定にかかわらず、受払帳を設けずに購入時に消費したものとして処理することができる。

第8章 固定資産の管理

(固定資産の範囲)

第43条 この規程において、固定資産とは取得日後1年を超えて使用又は保有する有形固定資産及び無形固定資産（土地、建設仮勘定及び権利を含む。）並びに経常的な取引以外の取引によって発生した貸付金等の債権のうち回収期間が1年を超える債権、特定の目的のために積み立てた積立資産、長期保有を目的とする預貯金をいう。

2 前項の固定資産は、基本財産とその他の固定資産に分類するものとする。

(1) 基本財産

- ア 土地
- イ 建物
- ウ 定期預金
- エ 投資有価証券

(2) その他の固定資産

- ア 土地
- イ 建物
- ウ 構築物
- エ 機械及び装置
- オ 車輛運搬具
- カ 器具及び備品
- キ 建設仮勘定
- ク 有形リース資産
- ケ 権利
- コ ソフトウェア
- サ 無形リース資産
- シ 長期貸付金
- ス 退職給付引当資産
- セ 保育所繰越積立資産
- ソ 保育所施設・設備整備積立資産
- タ その他の固定資産

3 1年を超えて使用する有形固定資産又は無形固定資産であっても、1個もしくは1組の金額

が10万円未満の資産は、第1項の規定にかかわらず、これを固定資産に含めないものとする。

(固定資産の取得価額及び評価)

第44条 固定資産の取得価額は次による。

- (1) 購入した資産は、購入代価に購入のために直接要した付随費用を加算した額。
- (2) 製作又は建設したものは、直接原価に、製作又は建設のために直接要した付随費用を加算した額。
- 2 固定資産の貸借対照表価額は、当該固定資産の取得価額から、第51条の規定に基づいて計算された減価償却費の累計額を控除した額とする。
- 3 固定資産の時価が帳簿価額から、50%を超えて下落している場合には、時価が回復する見込みがあると認められる場合を除き、会計年度末における時価をもって評価するものとする。

(リース会計)

第45条 ファイナンス・リース取引については、通常の売買取引に係る方法に準じて会計処理を行うこととする。また、利息相当額の各期への配分方法は利息法とする。ただし、リース契約1件あたりのリース料総額が300万円以下又はリース期間が1年以内のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行うことができる。

2 リース資産総額に重要性が乏しいと認められる場合には、前項の規定にかかわらず、リース料総額から利息相当額の見積額を控除しない方法によることができる。

3 前項に定める、リース資産総額に重要性が乏しいと認められる場合とは、未経過リース料の期末残高（賃貸借処理に係る方法に準じて会計処理を行うこととしたもののリース料、第1項又は第2項に定める利息相当額を除く。）が、当該期末残高、有形固定資産及び無形固定資産の期末残高の法人全体の合計額に占める割合が10%未満である場合とする。

4 オペレーティング・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行うこととする。

(建設仮勘定)

第46条 建設途中のため取得価額又は勘定科目等が確定しないものについては、建設仮勘定をもって処理し、取得価額及び勘定科目等が確定した都度当該固定資産に振り替えるものとする。

(改良と修繕)

第47条 固定資産の性能の向上、改良、又は耐用年数を延長するために要した支出は、これをその固定資産の価額に加算するものとする。

2 固定資産の本来の機能を回復するために要した金額は、修繕費とする。

(現物管理)

第48条 固定資産の現物管理を行うために、理事長は固定資産管理責任者を任命する。また統括固定資産管理責任者を任命することができる。

2 固定資産管理責任者は、固定資産の現物管理を行うため、固定資産管理台帳を備え、固定

資産の保全状況、及び移動について所要の記録を行い、固定資産を管理しなければならない。

3 固定資産管理責任者は、固定資産管理に関する報告、連絡等によって、統括固定資産管理責任者に行い、その指示に従わなければならない。

(取得・処分の制限等)

第 49 条 基本財産である固定資産の増加又は減少（第 51 条に規定する減価償却等に伴う評価の減少を除く）については、事前に理事会の承認を得なければならない。

2 基本財産以外の固定資産の増加又は減少については、事前に理事長の承認を得なければならない。ただし、法人運営に重大な影響があると統括固定資産管理責任者が判断したものは理事会の承認を得なければならない。

3 固定資産は、適正な対価なくしてこれを貸し付け、譲り渡し、交換し、又は他に使用させてはならない。ただし、理事長が特に必要があると認めた場合はこの限りでない。

4 固定資産管理責任者は固定資産台帳の誤謬により訂正が必要な場合、書類を以って統括固定資産管理責任者へ報告し、その指示に従わなければならない。

(現在高報告)

第 50 条 固定資産管理責任者は、毎会計年度末現在における固定資産の保管現在高及び使用中のものについて、使用状況を調査、確認し固定資産現在高報告書を作成し、これを会計責任者に提出しなければならない。

2 会計責任者は、前項の固定資産現在高報告書と固定資産管理台帳を照合し、必要な記録の修正を行うとともに、その結果を統括会計責任者、及び理事長に報告しなければならない。

(減価償却)

第 51 条 固定資産のうち、時の経過又は使用によりその価値が減少するもの(以下「減価償却資産」という。)については定額法による減価償却を実施する。

2 減価償却資産の残存価額はゼロとし、償却累計額が当該資産の取得価額から備忘価額（1円）を控除した金額に達するまで償却するものとする。但し、平成 19 年 3 月 31 日以前に取得した有形固定資産については、残存価額を取得価額の 10%として償却を行い、耐用年数到来後も使用する場合には、備忘価額（1円）まで償却するものとする。

3 ソフトウェア等の無形固定資産については、残存価額をゼロとし、定額法による減価償却を実施する。

4 減価償却資産の耐用年数は、「減価償却資産の耐用年数等に関する省令」（昭和 40 年 3 月 31 日大蔵省令第 15 号）によるものとする。

(1) 2 種以上の材質を使用しているものについては、そのものに使用している割合が高い材質の耐用年数とする。

(2) 前号において使用している割合が同じ場合、耐用年数が短期間であるものをそのものの耐用年数とする。

5 減価償却資産は、その取得価額から減価償却累計額を直接控除した価額をもって貸借対照表に計上し、減価償却累計額を注記するものとする。

第9章 引当金

(退職給付引当金)

第52条 職員に対して将来支給する退職金のうち、法人の負担する東京都社会福祉協議会従事者共済会退職共済金掛金相当額を退職給付引当金に計上する。又、退職給付引当金と同額の退職給付引当資産を計上するものとする。

(賞与引当金)

第53条 職員に支給する賞与のうち、当該会計年度の負担に属する額を見積り、賞与引当金として計上する。但し、重要性が乏しいと認められる場合には、これを計上しないことができる。

(徴収不能引当金)

第54条 金銭債権のうち、徴収不能のおそれがあるものは、当該徴収不能の見込み額を徴収不能引当金として計上する。但し、重要性が乏しいと認められる場合には、これを計上しないことができる。

2 徴収不能引当金として計上する額は、次の(1)と(2)の合計額による。

(1) 毎会計年度末において徴収することが不可能と判断される債権の金額

(2) 上記(1)以外の債権の総額に、過去の徴収不能額の発生割合を乗じた金額。

3 前項に規定する徴収不能引当金の金額は、これを該当する金銭債権の金額から直接控除し、当該徴収不能引当金の金額を注記する。

第10章 決算

(決算整理事項)

第55条 年度決算においては、次の事項について計算を行うものとする。

(1) 資産が実在し、評価が正しく行われていることの確認

(2) 会計年度末までに発生したすべての負債が計上されていることの確認

(3) 上記(1)及び(2)に基づく未収金、前払金、未払金、前受金及び貯蔵品の計上

(4) 減価償却費の計上

(5) 引当金の計上及び戻入れ

(6) 基本金の組入れ及び取崩し

(7) 国庫補助金等特別積立金の積立て及び取崩し

(8) その他の積立金の積立て及び取崩し

(9) 事業区分間、及び拠点区分間における貸付金と借入金との相殺、繰入金収入と繰入金支出の相殺

(10) 注記情報の記載

(内部取引)

第 56 条 計算書類及び附属明細書の作成に関して、事業区分間、拠点区分間における内部取引は、相殺消去する。

(注記事項)

第 57 条 計算書類には、次の注記事項を記載しなければならない。

- (1) 継続事業の前提に関する注記
- (2) 資産の評価基準及び評価方法、固定資産の減価償却方法、引当金の計上基準等財務諸表の作成に関する重要な会計方針
- (3) 重要な会計方針を変更したときは、その旨、変更の理由及び当該変更による影響額
- (4) 法人で採用する退職給付制度
- (5) 法人が作成する計算関係書類と拠点区分、サービス区分
- (6) 基本財産の増減の内容及び金額
- (7) 基準第 3 章第 4(4)及び(6)の規定により、基本金又は国庫補助金等特別積立金の取崩しを行った場合には、その旨、その理由及び金額
- (8) 担保に供している資産
- (9) 固定資産について減価償却累計額を直接控除した残額のみを記載した場合には、当該資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高
- (10) 債権について徴収不能引当金を直接控除した残額のみを記載した場合には、当該債権の金額、徴収不能引当金の当期末残高及び当該債権の当期末残高
- (11) 満期保有目的の債券の内訳並びに帳簿価額、時価及び評価損益
- (12) 関連当事者との取引の内容
- (13) 重要な偶発債務
- (14) 重要な後発事象
- (15) 合併又は事業の譲渡若しくは譲受けが行われた場合には、その旨及び概要
- (16) その他社会福祉法人の資金収支及び純資産増減の状況並びに資産、負債及び純資産の状態を明らかにするために必要な事項

2 計算書類の注記は、法人全体で記載するものと拠点区分別に記載するものの 2 種類とし、拠点区分の注記においては、上記(1)(12)(13)を省略する。

事業区分間取引により生じる内部取引高は、資金収支内訳表及び事業活動内訳表において相殺消去するものとする。同様に、拠点区分間取引により生じる内部取引高は、事業区分資金収支内訳表及び事業区分事業活動内訳表において相殺消去する。

(計算書類の作成及び確定)

第 58 条 統括会計責任者は、会計責任者から出された各拠点区分の決算数値に基づき、第 4 条第 2 項に規定する計算書類、及び第 3 項に規定する計算関係書類並びに財産目録案を作成し、理事長に提出する。

2 理事長は前項の書類を点検し、監事の監査を受けた後、監査報告書を添えて理事会に提出する。

3 計算書類及び計算関係書類並びに財産目録は、理事会の承認を得て確定する。

(計算書類の開示)

第 59 条 理事長は、前条の承認を受けた計算書類及び財産目録並びに事業報告書を「法人事務所における閲覧」、「インターネット上での公開」等により開示するものとする。

第 11 章 会計監査

(内部監査)

第 60 条 理事長は、必要があると認められる場合には、法人内の会計業務が関係法令及びこの経理規程の定めに従い、重大な誤謬発生の危険がなく効率的に行われていることを確かめるため、内部監査人を選任し監査させるものとする。

2 理事長は、前項の監査の結果の報告を受けるとともに、関係部署に改善を指示する。

3 監査報告に記載された事項に関する改善状況は、後の内部監査において、追跡調査するものとする。

4 理事長は、状況に応じ、必要があると認めた場合には、理事会の承認を得て、第 1 項に定める内部監査を外部の会計専門家に依頼することができる。

(外部監査)

第 61 条 理事長は、法人の会計の健全性及び透明性を高めるため、理事会の承認を得て、外部の会計専門家に対し、独立した第三者の立場からの監査を依頼することができる。

2 理事長は、前項の監査の結果を理事会に報告しなければならない。

第 12 章 契約

(契約機関)

第 62 条 契約は、理事長又はその委任を受けた者（以下「契約担当者」という。）でなければこれを行うことができない。

(一般競争契約)

第 63 条 契約担当者は、売買、賃貸借、請負その他の契約をする場合には、あらかじめ、契約しようとする事項の予定価格を定め、競争入札に付する事項、競争執行の場所及び日時、入札保証金に関する事項、競争に参加する者に必要な資格に関する事項並びに、契約事項を示す場所等を公告して申込みをさせることにより一般競争に付さなければならない。

(指名競争契約)

第 64 条 合理的な理由から前条の一般競争に付する必要がある場合及び適当でないと認められる場合においては、指名競争に付することができる。

なお、指名競争入札によることができる合理的な理由とは、次の各号に掲げる場合とする。

- (1) 契約の性質、又は目的が一般競争に適さない場合
- (2) 契約の性質、又は目的により競争に加わるべき者の数が一般競争入札に付する必要がないと認められる程度に少数である場合
- (3) 一般競争入札に付することが不利と認められる場合

2 前項の規定にかかわらず、「地方公共団体の物品等又は特定役務の調達手続の特例を定める政令」（平成7年政令第372号）第3条第1項に規定する総務大臣が定める区分により、総務大臣が定める額以上の契約については、一般競争に付さなければならない。

(随意契約)

第 65 条 合理的な理由により、競争入札に付することが適当でないと認められる場合においては、随意契約によるものとする。

なお、随意契約によることができる合理的な理由とは、次の各号に掲げる場合とする。

- (1) 売買、賃貸借、請負その他の契約でその予定価格が下表に掲げられた契約の種類に応じ定められた額を超えない場合
- (2) 契約の性質又は目的が競争入札に適さない場合
- (3) 緊急の必要により競争入札に付することができない場合
- (4) 競争入札に付することが不利と認められる場合
- (5) 時価に比して有利な価格等で契約を締結することができる見込みのある場合
- (6) 競争入札に付し入札者がいないとき、又は再度の入札に付し落札者がいない場合
- (7) 落札者が契約を締結しない場合

2 前項(6)の規定により随意契約による場合は、履行期限を除くほか、最初競争入札に付するときに定めた予定価格その他の条件を変更することはできない。

3 第1項(7)の規定により随意契約による場合は、落札金額の制限内でこれを行うものとし、かつ、履行期限を除くほか、最初競争入札に付すときに定めた条件を変更することはできない。

4 第1項の規定により随意契約とする場合は、契約金額において次の各号に掲げる見積書がなければならない。

- (1) 契約金額 300,000 円以下の場合、見積書 1 社以上
- (2) 契約金額 300,001 円以上 500,000 円以下の場合、見積書 2 社以上
- (3) 契約金額 500,001 円以上の場合、3 社以上

契約の種類	金額
1 工事又は製造の請負	1000万円以下
2 食料品・物品等の買入れ	
3 前各号に掲げるもの以外	

(契約書の作成)

第 66 条 契約担当者は、競争により落札者を決定したとき、又は随意契約の相手方を決定したときは、契約書を作成するものとし、その契約書には契約の目的、契約金額、履行期限及び契

約保証金に関する事項のほか、次に掲げる事項を記載しなければならない。但し、契約の性質、又は目的により該当のない事項については、この限りでない。

- (1) 契約履行の場所
- (2) 契約代金の支払い又は受領の時期及び方法
- (3) 監査及び検査
- (4) 履行の遅滞その他債務の不履行の場合における遅延利息、違約金その他の損害金
- (5) 危険負担
- (6) 契約不適合責任
- (7) 契約に関する紛争の解決方法
- (8) その他必要な事項

2 前項の規定により契約書を作成する場合には、契約担当者は契約の相手方とともに契約書に記名押印しなければならない。

(契約書の作成を省略することができる場合)

第 67 条 前条の規定にかかわらず、次に掲げる場合には、契約書の作成を省略することができる。

- (1) 指名競争又は随意契約で契約金額が 100 万円を超えない契約をするとき
- (2) せり売りに付するとき
- (3) 物品を売り払う場合において、買受人が代金を即納してその物品を引き取るとき
- (4) (1) 及び(3)に規定する場合のほか、随意契約による場合において理事長が契約書を作成する必要がないと認めるとき

2 第 1 項の規定により契約書の作成を省略する場合においても、特に軽微な契約を除き、契約の適正な履行を確保するため、請書その他これに準ずる書面を徴するものとする。

(定期的な契約内容の見直し)

第 68 条 物品等の購入について取引基本契約に基づき継続的な取引を行っている場合、定期的に契約内容の見直しを行うものとする。

(個人情報等流出防止策)

第 69 条 契約担当者は、売買、賃貸借、請負その他の契約をする場合には、次の各号に掲げる趣旨が明記されていない契約書では契約できないものとする。

- (1) 契約先事業者は、契約先事業者又は契約先事業者の関係者が当該契約に基づき知り得た契約元事業者の機密情報、契約元事業者が運営する施設の職員および利用者の情報について、一切他に流出させてはならない。
- (2) 前号の定めについては、当該契約終了後も同様とする。
- (3) 契約元事業者は、契約先事業者又は契約先事業者の関係者が前々号の定めに関し反した場合、他の定めに関わらず、何らの催告を要せずに当該契約を解除することができる。
- (4) 契約元事業者が前号の定めにより、当該契約を解除した場合には、契約先事業者に損害が生じても契約元事業者は何らこれを賠償ないし補償することは要せず、また、かかる解除

により契約元事業者に損害が生じたときは、契約先事業者はその損害を賠償するものとする。賠償額は契約元事業者、契約先事業者が協議して定める。

(暴力団排除策の徹底)

第 70 条 契約担当者は、売買、賃貸借、請負その他の契約をする場合には、次の各号に掲げる趣旨が明記されていない契約書では契約できないものとする。

- (1) 契約元事業者は、契約先事業者又は契約先事業者の下請負者及びその代表者、責任者、実質的に経営権を有する者（下請負が数次にわたるときはその全てを含む）が次の各号の一に該当する場合、他の定めに関わらず、何らの催告を要せずに当該契約を解除することができる。
 - (ア) 暴力団、暴力団員、暴力団準構成員、暴力団関係者、総会屋その他の反社会的勢力（以下、まとめて「反社会的勢力」という）に属すると認められるとき
 - (イ) 反社会的勢力が経営に実質的に関与していると認められるとき
 - (ウ) 反社会的勢力を利用していると認められるとき
 - (エ) 反社会的勢力に対して資金等を提供し、又は便宜を供与するなどの関与をしていると認められるとき
 - (オ) 反社会的勢力と社会的に非難されるべき関係を有しているとき
 - (カ) 自らまたは第三者を利用して、契約元事業者又は契約元事業者の関係者に対し、詐術、暴力的行為、または脅迫的言辞を用いたとき
- (2) 契約元事業者が前号の定めにより、当該契約を解除した場合には、契約先事業者に損害が生じても契約元事業者は何らこれを賠償ないし補償することは要せず、また、かかる解除により契約元事業者に損害が生じたときは、契約先事業者はその損害を賠償するものとする。賠償額は契約元事業者、契約先事業者が協議して定める。

附 則

- 1 この規程を実施するため必要な事項については、細則で定める。
- 2 この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から実施する。現行の規程は、平成 27 年 3 月 31 日付で廃止する。
- 3 平成 27 年 4 月 1 日から第 5 条 4 項に光が丘保育園拠点区分、石神井公園こぐま保育園拠点区分を追加する。
- 4 平成 28 年 4 月 1 日から第 5 条 4 項にきたひだまり保育園拠点区分を追加する。
- 5 平成 29 年 4 月 1 日から第 5 条 4 項に宮前おおぞら保育園拠点区分を追加する。
- 6 平成 29 年 10 月 1 日、一部改正
- 7 平成 30 年 4 月 1 日、一部改正
- 8 令和元年 6 月 1 日から第 5 条 4 項に、（仮称）北三丁目保育園拠点区分から国立ひまわり保育園拠点区分へ変更、区立南大泉保育園拠点区分を追加する。第 49 条 4 項及び、第 69 条個人情報等流出防止策、第 70 条暴力団排除策の徹底を追加する。
- 9 令和元年 7 月 1 日、第 10 条別表 1 を改正

- 10 令和2年4月1日、一部改正
- 11 令和2年10月1日、一部改正
- 12 令和3年4月1日、一部改正
- 13 令和4年4月1日、一部改正
- 14 令和4年4月1日、一部改正
- 15 令和5年4月1日、一部改正
- 16 令和6年12月3日、一部改正、令和7年1月1日施行

社会福祉法人国立保育会 経理規程細則

(本部経費の配賦基準)

第1条 各拠点区分の本部の運営に係る経費の負担額は、各拠点区分の前期事業活動支出の5%とする。

2 前項の負担額について、本部経費必要金額が不足する場合は、本部は借り入れ等で補うこととする。

3 各拠点区分の負担額と前期末支払資金残高を比べて、第1項の負担額が前期事業活動支出の5%に不足する場合は、各拠点区分は本部から不足額分を借り入れることとし、翌年度以降返済する。

第2条 本細則に定めのない事項については理事会において決定する。